

夏に舞う

歌舞伎

毛利綾香

歌舞伎に捧げる

今回は、中村時蔵先生の稽古を特別に見学させて頂けることになった。中村時蔵先生の稽古は、メディアに公開されることがめったにない貴重な機会である。中村時蔵先生は、女形へ女性の役を演じることの代表的な役者で、紫綬褒章を受賞もしている。

今回の稽古では、八月に講演する寿曾我対面工藤祐経館の場の練習だった。中村時蔵先生の声で研修生の方々がセリフを読む。が、私たちは素人にはほとんど聞き取れない。先生は研修生の言葉を一つ一つ丁寧に直していく。じっくりと聞いていたが、前後の違いがほとんど分らないくらいだ。研修生のかたも、汗だくになりながら稽古をしている。お互いにどれだけ歌舞伎という芸術に捧げているか、はっきりと伝わった。



歌舞伎の歴史

歌舞伎は、1603年に「出雲阿国」という女性によってはじめられたのがきっかけ。現在では男性のみで演じ、世襲制という特徴がある。歌舞伎座や国立劇場が代表的。

歌舞伎は人生そのもの

歌舞伎界の代表ともいえる、中村時蔵先生はこう言う。「私にとって歌舞伎は人生そのもの。物心つく前から役者として舞台に立って、演じてきた。子供のころは、女形が恥ずかしいと思うこともあったが、自分が次に引き継ぐと考えると何も嫌なことなんてない。」世襲であり、400年続く芸能だからこそその強い使命感。また、研修生の方も「好きでないところなことでできない。歌舞伎が純粋に好きだから、ここにいられる」何事も好きでないとやっていけない。その通りだと思った。

寿曾我対面

読めますか？

これは、ことぶきそがのたいめんと読む。歌舞伎演目の中でも代表的なものだ。鎌倉時代の作品で、一般に「対面」といえばこの作品を指す。源頼朝の重臣工藤祐経のもとへ二人の若者がやってくる。見れば、かつて工藤が討った河津三郎の忘れ形見、曾我十郎・五郎の兄弟だった。父の敵とはやる兄弟をなだめ、工藤が、再会を期して別れる物語。歌舞伎の様式美をつめこんだ、古典作品。

研修プログラム

概要

今回の研修プログラムとは、歌舞伎役者や、歌舞伎音楽をやりたい若者のため、そして後継者育成のために作られた企画で、中学校卒業から23歳までの男性に門を開いている。受講期間は2年間。現在は(2018年)23期生が研修中だ。研修を修了した人は、幹部俳優に入門し、現在では就業者における研修修了者の割合は3分の1にまでなっている。

編集後記

私もだが、一般の方々も歌舞伎に何か接点があるということは少ないと思う。今回私が感じたのは、役者さんの歌舞伎にかける情熱、それに限る。なぜそんなに一所懸命になるかといえば、引き継がなければいけないから、好きだから。日本の伝統文化というだけではなく、いろんな人の思いがあるからこそ一度は見に行ってみてほしい。

